

〔コメント〕

50年目の読者より

——日本思想大系 58『民衆運動の思想』（岩波書店）
「浮世の有さま」二の校注によせて——

青 木 郁 夫

とふひとの あらば こたへよ みちしるべ

三宅町伴堂杵築神社石道標
安政5（1858）年造立

序 詞

このコメントは岩波書店刊行の「日本思想大系 58」『民衆運動の思想』所収の「おかげ参り」に関する『浮世の有さま二（御蔭耳目第一）』の校注（安丸良夫担当）の若干についてのものである。「愛読者の窓」を通じた岩波書店編集部宛てのメールにも記したように、私の手許にあるのは1970年第1刷のみであるので、編集部に対してコメントの内容について次のようにその後の訂正・増補作業について確認をした。

「日本思想大系 58『民衆運動の思想』中「浮世の有さま」二（御蔭耳目第一）の校注（安丸良夫担当）につき、お尋ねします。私の手許にあるのは、1970年第1刷のみですので、後で指摘・確認することながら、後の刷りなどで訂正あるいは増補されている可能性があります。そこで、個々に指摘・確認することについて、1）すでに訂正・増補などがなされたことがあるか否か、2）それがなされてはなかったとしても、何らかの訂正・増補など行うような作業が進められていたか否か、3）あるいは、そうしたことは全くなされていなかったのか否か、4）訂正・増補がなされなかったのは、何らの指摘・確認がなかったからなのか、指摘・確認があったとしても、それを考慮・採用する必要を認めなかったからなのか。すでに、校注者が残念なことに亡くなっていますので、何らの情報がないかもしれませんが、わかる範囲でお教えいただければと存じます。」

岩波書店編集部からは丁寧な返信をいただき、このコメントにあるような事柄についての訂正・増補作業はその準備作業も含めてこれま

で行われたことはないし、また、読者からそのような指摘なども一切ないとのことであった。その後、コメントの第4点について史料確認をしたことを再度編集部宛てにメールした。これに対する返信はなかった（大学退職時に研究室のパソコンを初期化して返却しているため、以上のメールのやりとりの正確な日時、岩波書店編集部からのメールそのものは確認できない。メールの下書きからすると「愛読者の窓」にメールを送ったのは2018年3月6日か。ただし、2度目の岩波書店編集部へのメールは2018年5月6日付けで残されている）。それからそれなりの時間の経過があるが、『民衆運動の思想』の読者の参考に供するため『阪南論集』に掲載することとした。

当初、このコメントの表題を「本を作る者と読む者と」にしようかと考えていた。それは、校注者（ここでは、安丸良夫）と編集者との協同作業がどのように行われたのであろうかという素朴な疑問と、この『民衆運動の思想』がどのように読まれたのであろうか、この本に限らずもし読者が何らかの疑問をもった際にどのように行動するのかについて思いをめぐらせていたからである。そういう思いを持ちながらも、『民衆運動の思想』刊行後すでに50年が経過しており、しかも4つの校注についての若干のコメントにすぎないので、「50年目の読者より」と題して増補を施した。

コメント

『浮世の有さま（御蔭耳目）』（以下、『御蔭耳目』とする）の著者は、安丸良夫の解説によれば、「この記録の著者はあきらかでないが、美作国勝山藩出身の、大坂斎藤町に住む医師であった」（p.498, 頁数は70年第1刷）。これに記録されている「おかげ参り」は文政13（1830）年のものである。この稿を書いている時、奈良市史料保存館で「企画展示 おかげまいり——伊勢参宮と奈良町」が開催されていた。その展示のなかに「文政十四年（天保二）年暦」（奈良暦、南都陰陽師山村左門）があり、その持ち主が表紙に文政13年のおかげ参りの際の奈良町の状況を次のように記録している。「阿波国より始り伊勢太神宮江おかけと申、大坂より引続種々の轍其外いろいろ / 目印を建、大勢参り所々御被続々之由ニテ候四国播州 / 摂州河州大参大混雑」と。

指摘・確認したことがらは、以下の4つである。

1) 「札の辻」

『御蔭耳目』p.325下段5行目から「…大坂よりは、御役人衆、暗峠・長谷等へ大勢出張…奈良にては御奉行公事訴訟御休にて、与力・同心、札の辻其の外に出張し…」の「札の辻」に校注がなされ、「制札を立てておいた辻」となっている。ここの文章では「札の辻」は「普通名詞」として使われているようにも読めるが、p.329上段12行目からの「奈良にては札の辻、伊勢にては松坂、其の外に…」では、この「札の辻」は固有名詞として使われているようにしか読めないであろう。「札の辻」は確かに普通名詞としては「制札を立てておいた辻」であるので、全国各地に「札の辻」という地名は存在する。しかし、吉川弘文館の『国史大辞典』の「札の辻」にも東京に「札の辻」という地名が残っていることが書かれているように、個々の「札の辻」は特定の地点を指す「固有名詞」でもある（岩波書店編集部

へのメールに「奈良において『札の辻』といえば、大和八木にある『札の辻』を指すものと考えるのが自然である」と書いたが、これは私の不明のいたすところ牽強付会であった。そこで、それは撤回して、以下のように改める）。

p.326上段にも「奈良にては札の辻、長谷にてはどこそことて…」とあり、この「札の辻」がなら町を中心とした奈良のことであるので（「大和巡りひとり案内図」寛政8（1796）年、奈良県立図書情報館まほろばライブラリー）でも「なら」はそのようになっている）、高札場は興福寺の南西部の橋本町（札場町・ふだばちょうと呼ばれたようである）にあった。ここは東西には暗越奈良街道の行き着く先の通りと、南北には奈良坂を越えて来た奈良街道（京都山科追分で東海道から分岐する）が行き着く東向町・餅飯殿町の通りが交差する地点である（「和州奈良之図」天保15（1844）年、<https://kochizu.gsi.go.jp/items/262>）。そこから少し東に進むと、猿沢の池の西側を南に下る道に出る。この道が「上ツ道・上街道」で、桜井に通じる街道であり、三輪を経て初瀬街道・伊勢街道と交わる。なお、上街道を行くと京終の肘塚町には文政13年の常夜灯があり、その先には天保期、寛政期（大坂人の寄進）の「太神宮」と刻まれた常夜灯が残存している。奈良の「札の辻」とはここを指すのであろうか。ただ、奈良町には高札場は奈良回り八か村を含め14ヶ所あった。そのうち12ヶ所は切支丹札と捨馬札のみを掲げていた。主要な高札場は橋本町と奈良街道が通る奈良坂村の2ヶ所であった。この2ヶ所を奈良の「札の辻」は指すのであろうか。

奈良奉行所は奈良町に対して、おかげ参りの者に対する宿泊や食事などの施行を行うことを指示する触れをだしている。各町々でさまざまな施行がなされたことが町記録として残されている〔奈良市史料保存館でさまざまな御教示を得た。記して感謝の意を表したい〕。

したがって、この個所の校注は「札の辻」と言われることの由来を普通名詞の意味で書いたうえで、おかげ参りにかかわって、「札の辻」とい

Oct. 2021

50年目の読者より

う特定の場所が存することを指摘することが適切だと思われる。「札の辻」の校注に関して、改めたコメントは以上である。

さて、奈良奉行所が遠国奉行所のひとつとして奈良町だけでなく大和一国の行政・裁判を司っていたことから、奈良町以外の「札の辻」にも注目しておきたい。とりわけ、大和八木の「札の辻」に。ここは「札の辻」として現在にもその名を残しているからである。

大和八木の札の辻は、横大路（大坂・堺から竹内街道・長尾街道が横大路につながり、東に進むと初瀬街道（青越え伊勢街道、現宇陀市榛原区の「札の辻」で伊勢本街道と分岐する）¹⁾を経て松坂市六軒で伊勢街道へと続く）という東西の街道と、藤原京と平城京を結び南北にはしる古代の道のひとつ「下ッ道」（近世では「中街道」）が交差した地点である。「八木札の辻交流館」のパンフレットにもある『西国三十三所名所図会』[暁鐘成編輯、松川半山・浦川公佐画、嘉永6（1853）年板行]の巻八ノ二十八の「八木札街」の図絵の説明には、「東ハ桜井より泊瀬にいたる街道南ハ岡寺高取吉野等への道すじ西ハ高田より竹内当麻への往還北ハ田原本より奈良郡山への通路にして四方往返の十字街」となっており、「伊勢参宮の陽気駕をつれたる大和巡り両掛をせし西国順禮」も通り「近隣においての繁花」であると記されている（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）。

ここは、現在もこの地名「札の辻」と、旧いたずまいを残している（旧東平田家）の写真で、「止まれ」とかかかれている道が「横大路」で、「左から右へ」が「西から東へ」である。この道に交差するのが「下ッ道」で「左から右へ」が「北から南へ」）。さらに、この「札の辻」のすぐ西、横大路南側には、おかげ参りの接待所跡（古絵図には「摂待処八木」とある）があり、史跡として残っている。その説明板には「八木の恵比寿神社に残る絵図」があり、建物内に「薪、米俵とかまど、うす、三味線など」が描かれている。この摂待処には「明和8（1771）年」に「摂待連中」

が建てた太神宮常夜灯があった（現在は200mほど西に移されている）。さて、明和7年7月28日には史上最大級ともいわれる磁気嵐がおき長時間オーロラがみられた。「夜五ツ時分より北之方あかく候故、始ニ者京都出火申至り、其夜九ツよりあかき立あがり」「東の山より西之山迄赤筋立」がみえたと記録されている[『万珍敷事覚帳』、1986、p.921；国立極地研究所・総合研究大学院大学・国文学研究資料館の共同研究「江戸時代におけるオーロラ絵図と日記から明らかになった史上最大の磁気嵐」各ホームページ]。本居宣長は日記に次のように記している。「今夜北方有赤氣、始四時頃如見甚遠方之火事、其後九時頃至而、赤氣甚大高而、其中多有白筋立登、其筋或消或現、其赤氣漸廣而、後及東西上及半天、至八時頃消矣、右之變諸國一同之由後日聞」と[本居宣長、1974、p.318]²⁾。これは凶兆だったのであろうか。大和の地はこの年明和7年と翌8年は大日照りで旱魃に苦しんだ。それでも施行がなされている。どこにその余裕があったのであろうか。後の文政13年のおかげ参りに付随しておかげ踊りが河内国から大和国にひろがった。今に残るおかげ踊りの歌詞が当時のままかどうかは分からないが、「お蔭なりこそ 世間の人は 欲をはなれて センギョする」だったのであろうか[奈良県教育委員会、2014、p.449]。

竹内街道から横大路に入り、葛城をこえろと新庄に至る（葛城、新庄両町は合併して現在は葛城市）。新庄地域では文政13年のおかげ参りの時には施行宿綿屋に周りの町内から甘酒・にぎりめし・茶の摂待がなされたほか、三才山鳥居前摂待所でにぎりめし、高野街道との分かれ道では周辺5か村組合摂待所でにぎりめし、茶、施行駕、施行馬、施行牛、大樋街道尺土村摂待場でわらじなど、さまざまな摂待が周辺の村々から行われた[『諸事記録帳』、1984、p.470]。

また、新庄の東側で、横大路が通る大和高田の石園座多久玉神社には文政13（1830）年のおかげ参りの様子を描いた絵馬があった（1990年

焼失)。このことから文政13年のおかげ参りにおいても竹内街道などから横大路を通る伊勢参宮の人々の流れ(あるいは、その帰途の)があったことが分かるであろう。ここ大和高田でもやはり、食事や湯茶の接待などの「施行」が行われたという。その他、天明元(1781)年太神宮常夜灯が残されている(大和高田市では1997年から毎年10月に「高田おかげ祭り」が催され、「おかげ踊り」の「連」が街を練り歩く[大和高田市ホームページ])。

大和高田市から東に行くと橿原市に入るが、八木の西側では曾我に寛政10(1798)年の太神宮常夜灯がある。横大路が伊勢参宮に盛んに用いられていたことを彷彿とさせる。八木・耳成を過ぎ、古代の街道「中ツ道」が横大路と交差する地点の東北角にある三輪神社(藤原京域の北東角に位置するといわれる。境内には「大和名所図会」にも描かれている大櫓の古木がある。この大櫓は「御蔭参り」で横大路・伊勢街道を通る人々の目印にもなったという)の100mほど先の南側に、「文政十三年庚寅」と刻まれた太神宮常夜灯が「膳夫村」「施行□中」(3文字目が判然としない)によって建てられている。ここは橿原市膳夫町(かしわてちょう)である。これによって、文政13年のおかげ参りが横大路を利用したことがわかる。当然のことだが、時代により、またおかげ参りがどの地方、地域からのものであったのかによって、そして途中にどこによるのかによっても、伊勢へのルートは異なっていたことになる。[相蘇一弘, 1975]が、このことを諸記録により実例をあげて明らかにしている。

また、抜け参りのように既存の秩序・制約から逸脱し、一時的にせよ生を爆発、横溢した人々にとって、抜け参りでなくても伊勢参宮という一生のうちでもめったにない旅の機会に恵まれた人々にとって、伊勢参宮だけではなく、これにこと寄せて吉野、高野、西国三十三所、大和巡りなどさまざまな物見遊山をしても不思議ではない。したがって、さまざまな街道を通り、場合によっては施行をうけたであろう。この点については大和国御所町の施行記録にもと

づいて[中井陽一, 2007]が明らかにしている。御所町は紀伊方面から大和高田あるいは大和八木へ出て横大路にでる街道筋にあたる。文政13年のおかげ参りにおいては、施行宿に北は陸奥から南は薩摩まで全国71カ国から9,729人が泊まっている³⁾。

大和において交通の要衝にある「札の辻」としては、「桜井村の札の辻」[『桜井市史上巻』, 1979, pp.280-98]もある。ここは、南北に上ツ道・多武峰街道が通り、東西に横大路・初瀬街道が通る、その交差点・辻である。上街道が三輪を経て桜井東方の慈明寺あたりの追分で初瀬街道に至るようになると、奈良町からの伊勢参宮のルートが変わり桜井の交通上の位置も変化したことであろう。とはいっても、初瀬街道・横大路と多武峰街道との交差点であることには変わりはなく、また北上する道もあることから、交通の要衝であり続けた。

ついでに記しておけば、本居宣長は明和9(1772)年3月に「吉野に桜と思ひ立つ」とて旅にでている。この時、宣長43歳。この旅の紀行文が『菅笠日記』((寛政7(1795)年板行))である[本居宣長, 1973]。前年の明和8年には「おかげ参り」がおき、松坂の街は大量のおかげ参り=伊勢参りの人々で連日ごった返していたことであろう。宣長が旅にでたのは、これに触発されたわけでもないであろうが(宣長が『玉勝間』に「太神宮御蔭参り」について書いていることはよく知られている。それは「ある物に」よって宝永2年の御蔭参りが夥しい数の人々の参宮であったこと、享保3年春にも参宮人が増えたことが記録されているだけであり、御蔭参りについての感想は何も書かれていない。この宝永2年の御蔭参りを宣長自身は経験していない。宣長は明和8年の御蔭参りについては実見しており、日記にも四月廿八日「今月自上旬抜参宮人多、至下旬最夥矣、自山城国始、至下旬京都人夥参、所々奇瑞有之由也、津当所等人亦多拔出参、於両宮邊並所々有施行、去寶永二年有如此事之由、…」と記しているほか、五月九日、七月十三日にも抜参(おかげ参り)について記述

Oct. 2021

50年目の読者より

している[本居宣長, 1974, pp.322-3]。後年の『玉勝間』が実見した明和8年の御蔭参りに何も触れていないのは何故なのであろうか。宣長の養子・大平となる稲懸茂穂は、明和8年の御蔭参りに関して記しておいたものを安永5年に『おかげまうての日記』として浄書している(文政13年板行。[本居大平, 1927])。

この旅の目的は吉野の桜を見ることにあとと書いているが、同時に父親が子を授かることを祈願した吉野の子安神社に詣でることも目的のひとつであったし、それ以上に宣長が目的としたのは、吉野(菅笠日記上の巻)そしてその後訪れる飛鳥・大和の地(菅笠日記下の巻)での歴代天皇の御陵及び宮を尋ねること、あるいはその所在を明らかにすることにあつたといつてよい。松坂に居住していた宣長は、『菅笠日記』からすると、松坂から青越え伊勢街道を行き、桜井で多武峰方面に南下し(この交差点が「札の辻」)、吉野川沿いの伊勢街道にでて上市から吉野に至っている。その後、吉野からは上市に戻って比曾口から壺坂峠へ出る現「大淀古道」ではなく、吉野川を下って土田から畑屋を経て壺坂峠(東側に行けば高取山南麓を回って南東に下り比蘇寺へ続く「大淀古道」に、西側を行けば壺坂寺西側に出る)に至る山道を登っている。壺坂峠から壺坂寺に寄り、土佐を経て飛鳥方面に出(高取山の北西麓の土佐という地名がでくる[本居宣長, 1973, p.358]。ここには吉野、壺坂寺方面から来る壺坂道・中街道と、高取城へ登っていく土佐街道とが交差する地点に「札の辻」があつた)、この地域の御陵、宮跡を尋ねている(行程については、奈良女子大学学術情報センターがweb公開している江戸時代紀行集「菅笠日記」に図示されている⁴⁾)。

この旅での大和国巡りや御陵、宮跡巡りは、その道筋や御陵、宮跡の考証など元禄期に貝原益軒が残した紀行『大和巡覧記』(元禄9(1696)年板行)[貝原益軒, 1973, pp.45-81]も参照しているように思われる。それも強ち無いことではない。享和2(1802)年に支配勘定として大坂銅座での1年間の任務を終えて江戸に中山道を

通って帰還した、56歳の南畝大田直次郎(この時期は中国で「銅山」を「蜀山」ということから「蜀山人」の号を使っていたが、東京小石川本念寺にある彼の墓には「南畝大田先生之墓」と刻まれた墓碑があるので、ここでは「南畝」の号とした)は、この帰郷の旅を『壬戌紀行』[大田南畝, 1930]に著している(大坂に着任する際には東海道を行き、その旅を『改元紀行』に認めている)。この紀行で南畝は、飯塚半右衛門正重の『木曾路紀行藤波記』((明暦元(1655)年))とともに、貝原益軒が貞享2(1685)年の中山道・木曾路の旅を記した紀行『岐蘇路記』((宝永6(1709)年板行))[貝原益軒, 1930]にしばしば言及している。貝原益軒の紀行が、後年、さまざまな人々に旅の案内として用いられていたことが分かるであろう。

『菅笠日記』で本居宣長は街道筋についても触れており、「八木」に関してもいくつか記述がある。「八木といふ所より。桜井へかよふ大道」(横大路のこと[本居宣長, 1973, pp.364-5])、「八木より土佐へゆく大道」(中街道を南下し、高取・壺坂方面[p.369])、八木で「しばしやすみて物く」いながら、横大路を西へ行けば当麻・竜田に至るし北へいけば奈良に至るのにと考える[p.373]。八木が「大道の交差地点」であつたことがよく分かる。八木の札の辻、摂待所には明和八年と刻まれた「おかげ燈籠」があつたのを、宣長は見たであろうか。宣長たち一行は「八木を東へいでて」帰路につく。三輪の社(大神神社)・大御輪でら方面にまわり、「山辺の道」かと思われる細道を行き金屋で「ならよりはつせへかよふ大道」(上ツ道・上街道か)にでる。この道は「追分」で「桜井のかなたよりくる道」横大路と交差する(『西国三十三所名所図会』にも「追分」があり、前者の街道を「奈良より三輪を経て長谷に至る」道としている。但し、「追分」は「名所にあらず」と記している[巻八ノ廿五])。横大路・初瀬街道を萩原(榛原)まで戻ると、「札の辻」で宣長たちは帰途を「伊勢本街道(伊勢中街道)」(2021年6月国史跡に指定)にとる。一行は難路を避け、下氣多あたりでこの街道から



八木札の辻資料館



おかげ参り八木接待所跡



榛原の札の辻道標

右 いせ本かい道 左 あをこ江道

分かれ松坂に戻った。

中街道二階堂——街道・施行・太神宮石灯籠
『御蔭耳目』p.346「矢橋の船にのり…」の校注
には「大坂・西国方面からの参宮者は、往路は
暗峠から奈良に出て初瀬街道から神宮にゆき、
帰路は松坂から関を通過して東海道に出て大津から
伏見を通過して大坂へ向う者が多かったようである」
とあるが、奈良をどのように通っていっ

たのであろうか。

確かに、この時代には大坂方面から暗越奈良
街道を行き、奈良町を経て上ツ道・上街道を南
下し、三輪あたりで東寄りに分かれ、初瀬街道・
伊勢街道に合流するルートが中心だったのであ
ろう。「大和巡りひとり案内図」((寛政8(1796)
年))でも太い街道で示している。それに対し
て、貝原益軒は『大和巡覧記』で「大坂よりくら
がり嶺越、奈良へ出、梅谷を通り、加茂笠置を

Oct. 2021

50年目の読者より

へて、大川原より伊賀越、伊勢山田に行」と道案内をしている。この道は奈良から伊賀・奈良街道で伊賀越えをして伊賀上野に出るルートである。その先をどのようにして伊勢方面に出るかは記していないが、阿波、長野峠を越えて伊勢街道を行くか、あるいは伊賀・奈良街道を関まで行き伊勢別街道に入るかであろう。いずれにせよ、益軒の紀行から、元禄期には、大坂から伊勢に行くには、暗峠越え奈良街道で奈良に出、伊賀・奈良街道を行くルートがよく使われたことが分かる[貝原益軒, 1973, p.78]。

文政13年のおかげ参りは「当弥生の中頃阿波の国より数万人伊勢参宮いたし、おかげ参りと唱へ」られたことは先にも記したが、この時、阿波の撫養から船で「紀伊の国加田浦より和歌山城下ニ至、又は泉州堺浦等へ着船」したという[「天保元年上町おかげ灯籠建立諸入用并寄付記帳」, 2011, p.1122]。和歌山からは大和街道で橋本・五条・御所・高田あるいは八木に至る。堺からは竹内街道・横大路に至る。陸行だけでなく舟運、水行も辿る道筋としてしっかりと考えておくべきであろう。

上街道に対して、中街道沿いに「おかげ参り」に関わることがらはないのであろうか。菅原・尼ヶ辻から中街道を南下してみよう。といっても近世には二階堂より北では中街道は廃れ、奈良町から南西方面へ廻って「北の横大路」(横田街道と呼ばれた)が通る(現、大和郡山)横田あたりに出て、その先で中街道に交わった。道は時代とともに変遷するものである[『川西村史』, 1970, pp.35-6]。

ただ、尼ヶ辻から南下すれば、唐招提寺、薬師寺、大和郡山、稗田を経て、二階堂あたりの中街道にたどりつかないことはない。元禄期に京から大和を巡覧した貝原益軒は、菅原・尼ヶ辻あたりから、(唐)招提寺、薬師寺、大和郡山と南下しており、奈良を見たあと龍田越え奈良街道と思われる道を通り下街道から当麻寺を経て横大路に出ている。横大路を東に行き、この旅の紀行『大和巡覧記』では「馬駅」である八木について記述している。そこに「郡山より、直

ぐにこれに通る中道あり。四里半有。其の間に田原本と云町あり」[貝原益軒, 1973, p.57]と。「大和巡りひとり案内図」や「大和めぐり道法絵図」[天明2(1746)年、奈良県立図書館情報館まほろばライブラリー]では、龍田越え奈良街道から下街道が太い道で、中街道にあたる道は細い道で画かれている。また、『改訂 天理市史 下巻』, 1976, p.250]にある江戸時代の大和国の交通図(板行年不詳)にも、尼ヶ辻から郡山、筒井へと進み、少し東南東の横田を経て二階堂で中街道に至る道が画かれている([茨木啓子, p.162]に示された表「おかげ踊りの伝播状況」中には、横田より発志院(はしのいん、はっしいん)を越えた北方の「若槻村」から「尼ヶ辻近在菅原」に踊り掛けが行われたという記録がある)。

中街道沿い天理市二階堂菅田には文政13年の太神宮灯籠が残されている(ここには菅田神社発祥地という碑もある)。東側の隣村である旧荒蒔村に残る文政3年からの『宮座中ケ間年代記 第四之巻』には、天保2(1831)年に書かれた前年文政13年のおかげ参りの記録がある(荒蒔村宮座や村落景観などについては、扱われている時代は異なるが、[吉村公男・羽田野由憲, 1987; 澤井浩一, 1990; 上野和男, 1992])。これによると3月下旬頃より阿波国から「御影参り」が始まり、閏3月3日4日だけで「南都ニ而拾万余人有之噂」で、街道筋は「道壺里二人数壺万式三千人茂之有」ありさまであったという。「当国初瀬、萩原ハ何之仕迎無之」であったため、旅人は難渋し、跡戻りする人もあった。おかげ参りの際に各地で施行が行われたが、荒蒔村「当村者丹波市施行場ニ而施行仕候、米四石之内壺石ハ二階堂之施行場へ遣シ、三石ハ丹波市江遣シ、此時丹波市中町之施行場江在々より壺百四拾石余」も集り、施行したという([『荒蒔村宮座中間年代記』, 1977, pp.418-20]、現川西町結崎である「夕崎四ヶ村」は「丹波市中丁より世話人鍵屋万二郎願参」により、米1石、銭10貫文を施行している。夕崎中村は別途「むすひにて小大和へ出施行」もし

ている[『諸事控覚書』, 2004, p.212]。この史料には「おかけ参り法隆寺久保村ノ人十五人連」に対する施行も書かれており、「太子道」・田原本・「中街道」を歩いていく大和国内からのおかけ参りが想定される)。丹波市中町施行場は上街道沿いにあり、市座神社には天保元年に造立された「御かけ接待所」と刻まれた太神宮常夜灯が残されている。上街道側では施行駕籠、女駕籠([『忍坂村座中間』, 1981, p.153]には、「娘ハ男ニ成テ股引きやはん腰ニ非(緋)縮緬たばこ入をつけて男の髪ニ結テ、若連と共ニせんきょうの駕をかく」との記録がある)⁵⁾などが、長柄村、法貴寺村(現、田原本町、中ツ道よりも下ツ道に近い)、丹波市村などから施された[『福知堂村手覚年代記』, 1977, pp.543-4]。二階堂施行場は中街道沿い菅田にあったと考えられる。天理市ホームページの学区別の「大字の由来」によれば、北菅田に二階堂という地名があり、かつては二階堂村の起源になったという(また、[『天理市史史料編』, 1958, p.597]の「小字名」一覧には、大字北菅田の「小字名」に「二階堂」「二階堂下」がある。勝手寺跡、二階堂地藏堂に由来するか)⁶⁾。

荒蒔村では「太神宮おかけニ付」「石灯笼壺基」を建てている。これは「おかけとし建」で勝手神社に残っている。二階堂菅田の文政13年の太神宮常夜灯も同様の趣旨で造立されたものであろう((二階堂地藏堂から東へ荒蒔町勝手神社、少し北寄りに杉本町春日神社、戻って田井庄町八剣神社、やや南にずれるが田町厳島神社、そしてやや北に戻って丹波市町市座神社には、田町厳島神社のものを除き、いずれも「おかけ」の文字が入った文政13年か天保2年の太神宮灯籠がある。上街道の丹波市施行場と中街道の二階堂施行場を繋ぐかのような「おかけ灯籠」の道である。この道は、ほぼ、二階堂から石上神宮の参道である旧布留街道にあたる。中ツ道東側の東条里でいえば、9条と10条の間である([『改訂 天理市史上巻』, 1976, p.31] 条理図参照)。[『改訂 天理市史下巻』, 1976, p.250]にある江戸時代の大和国の交通図(板行年不詳)

には、この道が描かれている。また、杉本町春日神社から北方の同じく天保2年「寅おかげ年」の太神宮灯籠がある喜殿町八坂神社へは、近鉄前栽駅東側を南北に通る橋街道、「中ツ道」と比定される道でつながっている))。二階堂において施行が行われたということは、中街道を通る御蔭参りの人々(行くにせよ帰るにせよ)があったことを意味しており、中街道と文政13年の御蔭参りとの関わりの重要な傍証となろうか。

中街道田原本——石道標・太神宮石灯籠

二階堂から中街道を5kmほど南下すると田原本に至る。田原本にある道標のなかでひとつ変わった表示のものがある。それは街中の浄照寺東側の中街道沿いにあり、天保12(1842)年に建てられたもので、北面に八木方面への南行きの案内が、すぐ「大峰山、吉野、高野」と並んで「伊勢、初瀬、三輪」と刻まれている。他の道標は、南行きは「大峰山、吉野、高野」のみである。この道標が建てられた時期には、この中街道を伊勢参宮に利用する者があったことを示しているとみてよいであろう。田原本には大門東におかけ参りの年である明和8年の太神宮灯籠があるほか、田原本本陣町だけで江戸期のものが5基ある((1986年の田原本中学校郷土研究部の調査によれば、現、田原本町域には明和8年のものを最古として昭和年代までのものを含め61基(年代不明8基、明治以降9基を含む)の太神宮灯籠がある[田原本中学校郷土研究部, 1986]。地元では「ごうしんさま(郷神様)」と呼び大字や垣内ごとに7月16日に祭りがなされるという。このことは、後にでてくる三宅町でも同様である))。田原本から南東に行き初瀬川に出て三輪に至る道、三輪街道があったが、「大和巡りひとり案内図」にはそれは描かれていないが、[『改訂 天理市史下巻』, 1976, p.250]にある江戸時代の大和国の交通図(板行年不詳。天理市教育委員会に問い合わせたが、現時点では不明とのことであった)には「ヒロセ 宮古」から田原本に通じ、田原本から三輪に至る道が記載されている。田原本にある文

Oct. 2021

50年目の読者より

政13年おかげ参りに関係するであろう太神宮灯籠をみると、田原本本陣町を出て鍵状の曲がり道を行くと中街道沿い新町に文政13年の太神宮灯籠があり、阪手南の須佐之男神社に文政13年の「ヲカゲトシ」と刻まれた「天保二年」の太神宮灯籠があり、東味間に文政13年霜月造立の太神宮灯籠がある。これらは田原本から南東へ三輪・桜井方面に向かっている。このようなことからすると、先の道標の南行きは八木方面へ行けば横大路に曲がることも含めて全てに通ずるし、田原本を出て東南方面へに行き味間から現橿原市十市に出て三輪街道を辿れば「伊勢、初瀬、三輪」に至ると理解することもできるであろう[『橿原市史』, 1962, p.1022] (田原本の道標や太神宮灯籠などについては、田原本町自治連合会副会長の中西秀和氏にさまざまな御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい)。後者の理解を裏付けてくれるのが、三宅町伴堂杵築神社境内にある石道標である。この石道標は「太子道」沿いにあったと考えられるもので、安政5(1858)年に造立され、(元東南面)北西方向へ「左 たつた 法りうじ なら こほり山 道」、(元西北面)東南方向へ「右 田原本 三輪 多武峰 初瀬 道」と刻まれている。三宅町内には他にも「田原本街道・三輪街道」を指し示す石標が残っている[『三宅町史』, 1975, pp.605-10]。

河内方面から来る「龍田越え奈良街道」が斑鳩・法隆寺から東西に走る「北の横大路」と呼ばれる街道につながり、二階堂菅田から3km弱北で中街道を横切り、さらに東方の樺本で上街道と交差する。この道も「大和巡りひとり案内図」にあり、周辺地域の人々だけでなく、さまざまな旅人も通ったことであろう。大和川と寺川が合流するあたりの川西町南吐田(はんだ)には、年代不明の太神宮灯籠、金比羅大権現灯籠がある。河川改修などによって移設されているようだが(囲いの敷石にいつの時代かの石道標「すぐ はせ いせ 左 なら 郡山」が使われている)。ここは法隆寺方面から来て大和川を越えたところであり、安政2(1855)

年「右 郡山 奈ら 京 左 法りうじ 立田 大阪 道」という道標がある。この道標に従って右に行く道が、川西、三宅から田原本方面に続く「三宅道(太子道)」につながる。

田原本西北の三宅町の伴堂(ともんど)杵築神社には奈良県指定文化財にもなっている「おかげ踊り絵馬」がある。そのうち2面は天保2(1831)年3月と同年6月のもので、これは文政13年のおかげ参りの様を描いている。もう1面は慶応4(1868)年菊月(11月)のもので、これは「おかげ踊り」であり、「ええじゃないか」の様子を表している。さらに同町の屏風杵築神社及びその北北西の川西町結崎の糸井神社にも県指定文化財の慶応4年の「おかげ踊り絵馬」(市場村踊連中)がある(絵馬については後述)。三宅町内「太子道」沿いには垣内ごとに文化年間の太神宮灯籠が建っている。川西町では糸井神社から1kmあまり北方の春日神社(吐田)の境内に天保2年3月造立の太神宮燈籠があり、近鉄結崎駅から少し東に行った出屋敷の鎮守社境内に文政13年9月造立の太神宮燈籠があり(ここから東側800mほどで中街道に出る)、さらに、中街道まで150mほどの地点である上出屋敷の子安地藏付近((東側は、現、天理市庵地(おうじ)と境を接している。現在は道路改修により県道36号線北側にある))にも天保2年の太神宮灯籠があり、これらはいずれも文政13年のおかげ参りに関係しているのであろう。結崎は先の史料で丹波市からの施行の願いに応えているし、また二階堂の施行場に近いことからここにも施行したことが考えられる。このこともまた太神宮灯籠に関係しているのであろう(三宅町の両杵築神社についてはボランティアガイド会長森内哲也氏にご案内いただいた。糸井神社には拝殿内の絵馬を見せていただいた。また結崎や吐田の伊勢参宮やおかげ参りにについてもいろいろ御教示をいただいた。ともに記して感謝の意を表したい)。これらの神社はいずれも「太子道」と比定されている三宅道に沿っている(奈良県ホームページ、「歩く・なら」ウォーキングマップ「斑鳩から飛鳥へ 聖徳太子の往来道・

太子道(筋違道)」。上記した田原本の道標の東面、つまり西行きの案内には「龍田、法隆寺、大坂(龍田越え奈良街道へと続く)」と刻まれていたことからすれば、結崎、屏風、そして伴堂からの「おかげ参り」伊勢参宮は田原本を経由した可能性があるともてよいであろう⁷⁾。

「太子道」——おかげ踊り絵馬

おかげ踊りは文政13年おかげ参りがほぼ終わる盆過ぎの夏頃に河内国から始まり、やがて大和国に及び各地でさまざまに踊られた。河内では「参宮同様の風体当世衆腰限の半天・も々引・きゃはん手をひを着し、わらじをメ手ニハしでを携へ」[[天保元年上町おかげ灯籠建立諸入用并寄付記帳], 2011, p.1122]で踊り、これに「追々増長鼓・太鼓・ふへ・三味線なりもの入」になっていった。宇陀松山では「九月下旬より十月へ向此辺へ移来り、村々老若男女諸所へ踊に歩行候、其出立ハ浴衣又ハ別ニ好有るハ裾くりの立付けといふに、木綿染模様腰切手ぬぐい一組限り揃へ、音頭取大なる弊を建」て踊った[[文政十三年おかげ参り・踊りに付き], 2011, p.1120]。田原本地域では式下郡伊与戸村・北坂手村・南坂手村・宮古村、十市郡多村で踊りかけがなされたこと、そのために踊りの稽古がなされたことが記録されている。これに対して代官所は「人数大勢相集まる儀ハ風儀ニ拘り自然と農業ニ怠り可申儀」として「差留」ている。ここでは「別段衣類を拵候様之儀者無御座、銘々有合セ之木綿嶋又ハ同小紋等之綿入れを着し、壺ケ村ニ太鼓壺ツ宛持参仕拍子を取、其村之目印ニ白キ紙ニ而御幣を拵持行」った[[御影踊に付申上書], 1986, pp.104-5]。あるいはまた、忍坂村(現、桜井市)では、「師匠」について稽古をし、「凡おどり二百人、人足百人」で「絹布類ニ而九月十八日ニ宮ニ而いしやうぞろい仕候、是よりまいニち罷出」「弁当ハ長持」にいれ竿で担ぎ、桜井、宇陀、(三本松)長瀬、八木、三輪など20ヶ村ほどへ出向き「凡そ十日あまりおとりあるき仕候」という。村々から「祝儀」をうけ、大和国の村々で踊りがあったなかで、「忍坂村

大あたり」であったと記録されている[忍坂村座中間, 1981, pp.153-4]。御蔭踊りは群衆乱舞ではなく、しだいに村ごとあるいは集落ごとに組織立った秩序ある「踊り」になっていった。衣装についても銘々まちまちのところもあるが、揃いの衣装となっていく様子が窺われる。

慶応3年のおかげ踊りは「ええじゃないか」でもあり、新庄では「何もおどりと申はいろいろのふうをいたし、先赤じばんを着し女ハ男のふうぞくをいたしめいめいごへい又ハしでなぞをもちてをとる事甚タしく」「をかげじやゑいしやないかえいじやないか」とはやしながら、「大いこをたたきかねをたた」いて踊り、はては家の内に入り込み「ゆかのぬけるほど」踊り狂ったと記録されている[[聞書控], 1984, p.355]。三輪でも、「伊勢御祓降臨」により十月「十一日七ツ時頃ヨリ下市馬場崎(先)ヨリ御蔭ナリト唱へ、老若男女ヲ論ゼズ、大ニ戯レ踊ル」状況が展開されたという[法念寺(融通念仏宗), 1981, p.766]。町方ではまさに群衆乱舞の状況であるが、むしろ大和国の多くの地域(村方)では村あるいは集落ごとにおかげ踊りの役割を「太鼓」「三味線」「すり鉦」「中踊り」「女踊」「おんと取」「ふえ方」「的」「あんど」「のぼり」「ほら貝」「火縄扱」「床扱」「セ話方」ときっちりと決め、整然と秩序を保って踊られた[[慶応三年御影ゑいぢやないか役割], 2004, pp.602-6]。そのありさまは、次の絵馬を見れば明らかとなる。

三宅町伴堂杵築神社、屏風杵築神社、川西町糸井神社の「おかげ踊り絵馬」は、おかげ踊りの様を色鮮やかに巧みに、臨場感あふれるままに描き、実に印象的である。すでに、これらの「おかげ踊り絵馬」については[牧村史陽, 1970]や[岩井宏實, 1970:1987]などの研究報告がある。先行研究によりながら、重複をいとわず、写真を付したものについて、私見を述べておこう。ついでに付け加えておけば、糸井神社がある川西町結崎は大和猿楽四座のうちの結崎座があった地であり、神社の南方寺川沿いに「面塚」(河川改修のため移動している)および「観世発祥

Oct. 2021

50年目の読者より

之地」碑がある。また、田原本秦ノ庄にある秦河勝創建と伝えられる「秦楽寺」の門前には「金春屋敷」があったと伝えられている。この地域は、猿楽、能楽と深いつながりがあったと考えられている。

三宅町伴堂杵築神社の天保2年3月奉納の「おかげ踊り絵馬」は、太神宮の行灯の上に御幣を立て、その周りに三味線、太鼓、胡弓などのおんど取り、はやし方や世話方が並び、2列12人の踊り手が画かれている。役割に応じて衣装をそろえている。現在でも、それぞれの名前が認められていることが見て取れる。

同じく三宅町屏風杵築神社の慶応4年9月奉納の「おかげ踊り絵馬」は、おかげ踊り・「ええじゃないか」を画いたもので、いまでも色鮮やかに残っており、その動きが伝わってくるようである。「ええじゃないか」に群衆乱舞のイメージしかもっていない者には、意外の感があるかもしれない。三宅町北側の『川西町史』史料にあったように、地域(里)で役割分担をし、組織だった準備のもとに慶応3年の「おかげ踊り」が行われたことが分かる。岩井宏實は[岩井宏實, 1984, p.168]で、「御蔭踊」図絵馬について「その詳細についてはすでに発表している」として、[岩井宏實, 1970]をあげているが、まだ絵馬を十分に読み取り尽くしてはいないように思われる。番号を付している部分が筆者が付加したことがらである。この論文発表時からすでに50年以上が経過しているので、絵馬の状態自体から読み取れることが変化している可能性があることにも留意しておきたい。まず踊り手が手前からシデ(幣)踊り・扇子踊り・手踊りの3列が画かれ、その衣装は黒のカンバン(法被の一種か)に黒の股引、草履履きで、2列目の扇子踊りは片袖を脱ぎ、柄物の襦袢を出している[同上, p.37]。①日の丸の扇子をかざして踊っているのは女たちであろう。画かれた1人1人の顔つきが違い、その顔容から女であるという印象が残る。このことは[牧村史陽, 1970, p.99]が、「第二列の十人はそろいの手古舞姿をした女のようにある…」とすでに指摘している。②

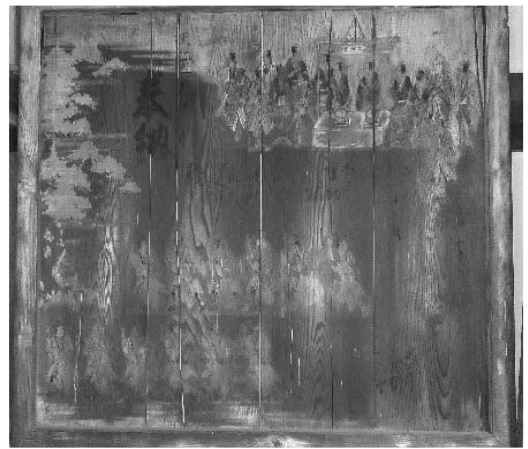
柄物の襦袢は茶色を基調とし、白の点書きが見られるので、鹿の子模様のものもあり、袖口が白のものあり、他の絵柄のものもある。③2列目の扇子踊りが女たちだというのは、襦袢に緑の「半襟」を付けているように見えることからでもある。次に、カッコ(羯鼓)(?太鼓であろう)、三味線などの鳴りものの囃子方の列の左から、袴をはいた男2人は[同上, p.38]、④左手に鉦(すり鉦)をかかげて、これを鳴らしているように見える。傘をさした男2人(?)はなぜこのような格好をしているのであろうか。⑤左手に傘をさした格好といい、傘が白色になりや青色の絵柄か文字(例えば、おかけ、ひやうふ、あるいは、志らなみ、とか)が書かれているように見えることから、白波五人男((河竹黙阿弥「青砥稿花彩画」(文久2(1862)年江戸市村座で初演)の「稲瀬川勢揃の場」))を仮装しているように思われる。それは、⑥1人が「大當」と書いた扇子を持っていることから、歌舞伎や人形浄瑠璃、あるいは大衆演芸、村芝居などの興行の「大當」を模しているようである。この屏風里の「おかげ踊り」が他の地域のおかげ踊りの連よりも人気を博すことを期待しているかのようでもある。右上に3人の男が描かれている。⑦同じ衣装を身につけ、立ち姿は異なるが、同様の持ち物(おそらく弁当をいれた行李)を「おうこ」(天秤棒)らしきもので担いでおり([牧村史陽, 1970, pp.99-100]が見立てたように)、[「屏風里氏子」の一員であろう。「物売りらしい男」でも「通りすがり」の「見物人」[岩井宏實, p.38]でもないであろう([同上]は「あるいは、踊衆のために食べ物を運んできた人たちであろうか」とも述べてはいるが)。

川西町結崎の糸井神社の慶応4年のおかげ踊り絵馬には、4列に並んで踊る姿が描かれている。前から3列目は扇子を持って踊る女たちで、そろいの着物姿である⁸⁾。1列目はシデ(幣)を持っている。衣装はよく分からないが、男たちも揃いの着物で、裾をくった立付け(あるいは、踏込袴か[『福知堂村手覚年代記』, 1985, p.544])に、草鞋履きのようである。

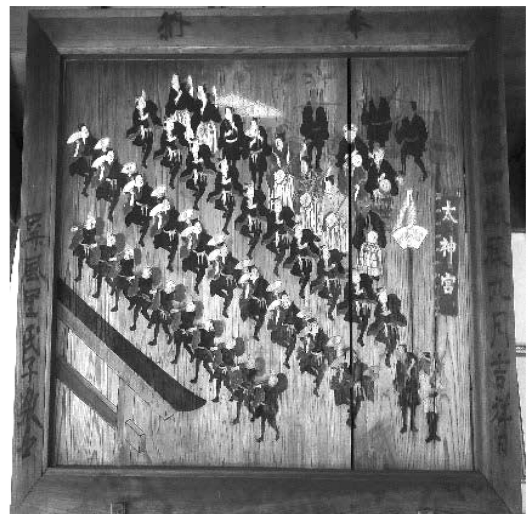
奈良県指定文化財一覧を見ると、山辺郡山添村菅生(すごう)の「おかげ踊り」が無形民俗区分で指定されている。この「おかげ踊り」は文政13年のおかげ参りに付随して行われるようになったという。7つの組の講がうるう年に伊勢代参を行い、帰村後の宴の時に各講組に踊り込みがなされたという。北の横大路が樺本で上街道と交差した地点では市場が開かれ、現在でも馬出(うまだし)の街並みが昔の面影を伝えている。交差点には享保12(1727)年の「右なら、左たつた」と刻まれた道標がある。ここから大和高原の福住や針に通じる高瀬街道が東に延びている。この先に菅生は位置する。交易や交通の流れはこの街道を伝って、菅生にもすぐにおかげ参りのことを知らせたことであろう(おかげ参りが60年周期だということもあり)。菅生からのおかげ参り伊勢参宮はどの道を通ったのであろうか。想像をたくましくすれば、伊賀上野方面に出て、伊賀・大和街道から東海道関宿経由で伊勢別街道を行くことも考えられるが(このルートはかなり北側に迂回する)、菅生北東の名張川五月橋(1928年架橋、山添村遅瀬—伊賀市治田間)あたりまで歩き、船で川を渡って、そこからまた歩いたというから[奈良県教育委員会, 2014, p.4]、伊賀上野方面に出てから阿波、長野峠を越える伊賀街道を行き、津で四日市の日永の追分で東海道から分岐してきた伊勢街道に合流するか、または五百野で奈良街道を進み松坂に至るかであったであろう⁹⁾。あるいは菅生地区の南東は名張市に接しているので、やはり名張方面に出て、青越え伊勢街道を行くことがあったかもしれない([山添村教育委員会『山添村の文化財——約1万5千年の奇跡の文化』], 山添村教育委員会事務局にいろいろ御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい)。

文政13年のおかげ参りを機にした「おかげ踊り」は同年7月頃より始まったとされ、「初メハ河内国より踊り初メ、大和国も在々不残おどり申候、此時御上様より御差留も有之、尚南都御番所様よりも御差留被成候得とともまり不申」

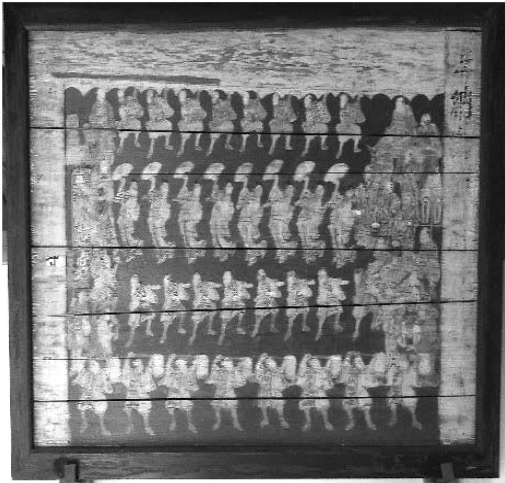
あるいは「此時ニ柳本様ハ至而厳敷御差留被成候、同年十一月八日ニ柳本御屋敷御陣屋焼失棟数四拾八棟焼失、是ハおかけ之施行もなくおかげおとりも出し不申候ニ付焼失と之噂これあり」[『荒蒔村宮座仲間年代記』, 1977, p.419]と記録されているように、御上の禁止がなされても処々方々でおかげ踊りがなされたということをつけ加えておこう(民俗芸能として残る「おかげ踊り」は奈良市田原でも継承されている。ここ田原地区は奈良市街から「北野」行きバスで20～30分の丘陵部で、奈良市東部、柳生地



伴堂杵築神社(天保2年3月奉納おかげ踊り絵馬)



屏風杵築神社(慶応4年9月おかげ踊り絵馬)



糸井神社（慶応4年おかげ踊り絵馬）

区の南に位置する。田原横田には太安万侶墓がある。それはさておき、田原地区のおかげ踊りは慶応3（1867）年の「ええじゃないか」の際に踊られたものを継承しているという〔奈良県教育委員会，2014，pp.489-505〕。

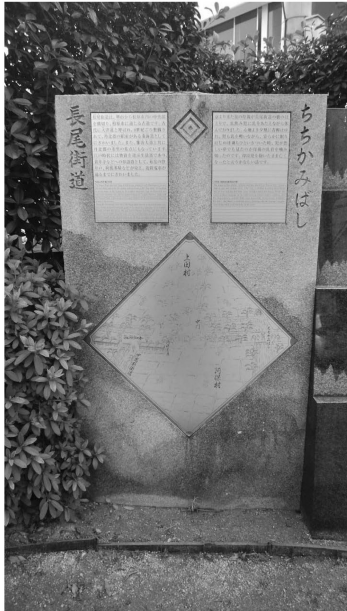
2) 河内国松原

『御蔭耳目』p.344上段3行目「同国（河内国）松原…」の校注は「東大阪市松原」となっている。「浮世の有さま」の記述によれば、この時期の大坂からのおかげ参りが暗峠越え（暗越奈良街道）が多かったということから、これでよいであろう。ここには松原宿がおかれ、いまでも街道筋の道標が残っている。すぐ西隣の菱江地区には天保2（1831）年に建てられた「おかげ燈籠」があり、八剱神社には「おかげ」と刻まれた同じく天保2年の道標が残っている。先の「大和巡りひとり案内図」にも暗越奈良街道に松原宿が大きく書かれている。

しかしながら、河内国にはもうひとつ松原の地名がある。『大阪府の地名』の「松原村」（東大阪市松原）の解説中〔『大阪府の地名Ⅰ』，1986，p.970〕に、貝原益軒の『諸国めぐり南遊紀行』を引いて河内国には松原の地名が2つあることが書かれている（「此国丹南郡にも、松原と云

ふ所有。故に、爰をくらがり松原と云。丹南にあるをば、丹南松原といふ」〔貝原益軒，1973a，p.108〕）。もうひとつの松原（＝丹南松原）は、近鉄南大阪線「河内松原駅」あたりを指す。名称が同じだからというだけではなく、この地が大坂から「難波大路」や「高野街道」で南下してくると、奈良へ通う古代の道では「竹内街道」に、近世では「長尾街道」と交差する地であるということでも注意しておくべきである。伊勢参り・おかげ参りが暗峠越えでなければ、この地を通って行く人々が多かったと考えられる。〔『松原市史第1巻』，1985，p.863〕に、「この『ええじゃないか』の乱舞は大坂市中だけでなく、周辺の農村にも波及した。しかし松原市域では、これに関する記録が見当たらない。」と書かれているが、〔藪重孝，1931，p.64〕には、中河内郡天美村（現、松原市天美）の73歳の老女川西コルイの「村の連中は赤の襦袢を着て男女が肩を組み踊った。私も赤襦袢で踊った」という回想談がある（慶応三年の御蔭騒動は「ええじゃないか」であろう）。このように、史料収集が行き届かなかったために市史編纂時に古文書が見つからなかったというだけであって、松原市域（河内松原）が伊勢参り・御蔭参り・ええじゃないかに関係していないわけではないのである。

上述したように、大坂から南下してくる「中高野街道」と東西に通る「長尾街道」とが交差するあたりには、江戸時代には「阿保茶屋（あおんちゃや）」があり、その説明板（（2013（平成25）年10月松原市設置））には「おそらく江戸時代に庶民が高野詣りやお伊勢参りなどに出かけるようになって、街道が交わる交通の要衝であった当地に休憩場所として茶屋が建ち並ぶようになった…」と記されている。貝原益軒が『諸国めぐり南遊紀行』に纏めた旅は、元禄2年に山城、河内、和泉、紀伊、大和を経巡ったものであった（参照した『和州巡覧記』の板行年は元禄9年のものが原本であるが、『南遊紀行』のなかで「吉野山の事は和州巡覧記にくわしく記したれば、…」〔貝原益軒，1973a，p.126〕とあるので、



長尾街道説明碑



阿保茶屋碑

『和州巡覧記』の旅のほうが先行していたことになる)。この旅では京都から主に東高野街道を行き、河内国で西側に寄って中高野街道に出て南下し「阿保村」を通っている[同上, p.109]。ひょっとしたら、「阿保茶屋」によったかもしれないと想像をたくましくする(反正山地蔵堂には、「元禄8年9月 松原内阿保茶屋」という銘がはいった鰐口がある)。

校注に書き添えるまでもないかもしれない。しかし、伊勢まいりにこのルートが使われたことは松原市内の長尾街道等の説明にも書かれていることであり、これらの点に触れることは近世の交通を語るうえでは意味があると思う。

3) 御幸町六角

『御蔭耳目』p.344下段11行目の「御幸町六角辺りにて」では「御幸町」に「みゆきちょう」とルビが付され、「大阪市都島区」と校注されている。これはどうであろうか。この前後の文章には京都におけるぬけ参りについての話題が書かれているのであるから、「御幸町六角」について

も京都のこととするのが自然であり、現在もある「御幸町六角(ごこうましろっかく)」とするのが適切である。何故、ここの文章を読んで、突然に京都から大坂にとばなければならないのか。

[[「改正京町御絵図細見大成」, 1977] ((天保2(1831)年初版, 慶応4(1868)年再版)) には、御幸町通り、六角通りが明記されている。まさに文政13(1830)年のおかげ参りや慶応3(1867)年「ええじゃないか」の時期の絵地図である。京都にしばらく住んだことがある者であれば、「御幸町六角(ごこうましろっかく)」はすぐにピンと来る。六角とは華道池坊のあの六角堂(頂法寺)を指し、六角通りはその南側を東西に通る。御幸町通りは丸太町通りから南へ南北に通る。この二つの通りが交差したところが「御幸町六角」である。

それでは大阪の「御幸町(みゆきちょう)」はどうか。『大阪府の地名』によれば、現在、「御幸町」は都島区と東大阪市の2ヶ所にあるが、行政区画変遷図(都島区は[[『大阪府の地名Ⅱ』, p.1556], 東大阪市は[[『同上書』, p.1568]]から

Oct. 2021

50年目の読者より

は、この2つの「御幸町」はいずれも1886(明治19)年の「地方行政区画便覧」にその名を見いだすことはできない。「御幸」という地名が存在したとしても、村以下の字名であったであろう。いずれの御幸町にも「六角」は存在しない。「都島区」の「御幸町」は比較的狭い地域なので、その地域を歩き、幾人かに尋ねてみても、周辺地域で「六角」は確認できなかった。「東大阪市」の「御幸町」は近鉄奈良線瓢箪山駅を南に下がったところで、東高野街道に面した地域である。地元の人に聞いても「六角」は知らないということであった(ここから2kmほど北上すると、箱殿で暗越奈良街道と交差する。国道170号線箱殿交差点から東側1つ目の信号機がある交差点)。



現在の御幸町六角(ごこうましろっかく)

4) 東海道見付宿中川

『御蔭耳目』p.369下段後ろから4行目から「施行の人目に立ちぬるは、東海道見附の宿なりといへり。橋の左右に掛出しをなし、往来道を異にして混雑せざるやうになし、処々にて枇杷葉湯を煎じ、双方の詰めには風呂を多くすへ、髪結床をかまへ、参宮人に沐浴せしめ、食物を与へ、又施行宿も多かりと云」に校注があり、地名と「以下の記述は太田川にかかる橋に関するものであろう」とされている。これは何か根拠となる文書があるのだろうか。歌川広重の東海道五十三次の見附の絵が天竜川の渡しあるいは一言坂を描いているので、見附の宿場内ではな

くてもいいのかもしれないが、太田川は見附の宿を江戸方面つまり東にぬけ、日本左衛門(「白波五人男」の日本駄右衛門のモデル)が獄門さらし首にされた場所ともいわれる「遠州鈴ヶ森」の刑場をこえた、さらにその先にある川である。この部分を読んだとき、見附に生まれ育った者からすると、太田川は宿からかなり隔たっているこの川やこの川に架かった橋を思いうかべることはなく、この橋は本書『民衆運動の思想』p.481にもでてくる幕府陣屋があった中泉から見附の宿に入ってくる場所にある「加茂川」か、宿の中ほどを流れる「中川」(現、今之浦川)かに架かっていた橋なのではないかと思われる(『図録『生誕220年 歌川広重の世界——保永堂版東海道五十三次と江戸の四季』企画編集公益財団法人平木浮世絵財団(2016年)には、それぞれの宿駅の図に対応して『東海木曾両道中懐宝図鑑』から関連箇所が載せられている。「見付」の宿駅の場では「かも川ばし」が描かれている。因みに、現在字にした挿入では「賀茂川橋」と表記されているが、「加茂川」である))。

このことを明らかにする史料として、文政13(1830)年のおかげ参りに係わる記述が見付の『見付宿庚申講掛銭帳』にある。そこには「扱、伊勢御影参り、閏三月、四月分始まり、此節駿遠、相州分夥敷御影参出申候、西宿々々々施行有之、浜松宿神明丁ニ而此節施行始り申候、当宿宿町ニ而も当五日分中川橋上ニ而風呂施行始申候」とある[『磐田市史 史料篇5 近世追補2』, 1996, p.85]。さらに、やや長くなるが引用すれば、「扱、当年ハ御かけ(蔭)参り、…、誠ニ当所并諸方々参宮おびた、しく参り、分ケ而盆後十七日分まい(毎)日、のいせ(伊勢)参り、誠ニ八月十一日当所祭礼<天神社裸祭>之様成くんずゆ(群衆)、丁内権現東角へせつたい(接待)膳ぶ(部)ニ而めしくいほうだい<飯食い放題>、一日に六、七俵ヅ、入、丁内軒別ニ五、六人ツ、もわり付、せつたい(接待)場所へ見舞出、且近在近郷分も村々分おかけ(御蔭)せつたい(接待)へ差米当有之、村々分武俵、三俵ヅツ



東海道見付宿案内図

も村中むちゅう(夢中)二成、権現小路東角迄送り届け、まい日せつたい(接待)場所々々つみ(積)米沢山ニ御座候、扱又おかけかこく御蔭駕籠>など誠ニ珍敷事、前後まれなり、中川橋ニすいふる(風呂)せつたい(接待)并ニかみゆい(髪結)せつたい(接待)、馬々<馬場(町)>宮小路白かい(粥)せつたい(接待)、西坂御ぜん(膳)(せ)つたい、其外所々せつたい(接待)場御座候、最早いせ(伊勢)路なりしずまり<なり静まり>申事ニ御座候」《寅九月廿七日 大海屋 弥市 の記か》『同上書』p.86。文中()内は編者による注、< >内は青木による注]。まさに、『御蔭耳目』(p.369)記述通りの施行が「中川橋」で行われたことが分かる。これで校注が不適切であることは明らかである。上では1996年刊行の『磐田市史 史料篇5 近世追補2』を引いたが、実はこの史料はすでに1956年刊行の『磐田市誌下巻』(p.622)に引用されている。したがって、『民衆運動の思想』が編輯出版された時期にはこの史料を参照することは可能であった。

写真の「東海道・見付宿」は上を北にして描かれており、横に通る街道のうち上側が旧東海道で(下側は国道1号線)「左から右へ」が「西から東へ」である。旧東海道に交差するように地図のなかほど右側に水色で「北から南へ」に流れる川が「中川」、旧東海道にかかる橋が「中川橋」である。東海道見付宿の地が、『民衆運動の思想』p.481にでている幕府の中泉陣屋((1869(明治2)年中泉奉行所となり、最後の奉行とし

て前島密が赴任した[『磐田市誌下巻』, p.655]))があった中泉(町)などとの町村合併を経て、磐田市になっていることなど少し調べれば直ぐに分かることである。

結

『民衆運動の思想』の編集部への「読者たより」のような以上のコメントをもって「50年目の読者より」の内容は尽きるので、「結」とするようことがらはとりたててない。「50年目」としたのは『民衆運動の思想』刊行50年目を待ってこのコメントを書こうと意図したためではなく、さまざまな興味から本書を読んだのが刊行後50年前後を経過した時期だったということにすぎない。そのため、「序詞」に記したように、岩波書店編集部にコメント内容がすでに既知のことであるか否を尋ねたのである。安丸良夫氏の研究には『日本の近代化と民衆思想』(手許にあるのは平凡社ライブラリー版、1999年。このカバー図にも歌川芳幾「豊饒御蔭参之図」が用いられている)ほかに触れ、大いに得るところが多くかつ、分野を異にするが、研究上の刺激を得てきた。「浮世の有さま」「御蔭耳目」の校注者である安丸良夫氏の死去を悼んで編まれた『現代思想』(2016年9月臨時増刊号、青土社)の追悼記念号の表紙は、奇しくも、歌川広重の「伊勢参宮宮川の渡し場」であった。何かの縁であろうか。

東海道見付宿(静岡県磐田市見付)に生まれ育ち、大学院時代以降京都市に居住し、大阪府松原市にある阪南大学に勤務し、研究対象の一つである奈良県医療利用組合連合会病院(現、奈良県立医科大学病院)が大和八木にあるということが、コメントした各地域の状況を実感しているという認識の基礎条件をつくった。それがあったがために、『民衆運動の思想』の校注にひっかかるものを直ぐに感じさせたのであろう。この「読者から読者への」コメントが他の読者の参考になるか否かはわからないが、「直感」をないがしろにせずにその適否を究明してみる

Oct. 2021

50年目の読者より

ことは必要なことであろう。

さて、退職を迎えて書棚の本を片付け読みを
するとともに、東海道や中山道はもちろんのこ
とあちらこちらの街道を歩いている。その経験
から『民衆運動の思想』『浮世の有さま』p.329の
「関」についての校注についても一言。校注にあ
るとおりに東海道関宿から伊勢に向かう街道
が分岐している。関宿の東の追分から浄土真宗
高田派本山専修寺のある津市一身田を経て江
戸橋で伊勢街道と交わるこの街道は、校注には
「伊勢街道」とあるが江戸期には「いせみち」「参
宮道」「山田道」と呼ばれ、明治期より現在まで
は「伊勢別街道」と呼ばれている（三重県ホー
ムページ「みえの歴史街道」のうち「伊勢別街
道」）。また関宿の西の追分からは「いかやまと
みち」、江戸期には加太越奈良道と呼ばれた伊
賀街道・大和街道が分岐している。芭蕉が終焉
の地となった大坂に向かった「最後の旅」の際
に通ったのもこの伊賀・大和街道から暗越奈
良街道であった（芭蕉翁記念館ホームページの
「俳聖 松尾芭蕉 伊賀（三重）での行動」に「元
禄7（1694）年9月8日」に「伊賀上野を出て大
坂に向かう。笠置・加茂間は川船に乗り、奈良

に一泊。」とあることから、このことが分かる）。
関宿が東海道から伊勢に向かう街道の分岐点の
一つであったことだけでなく、歴史ある交通の
要衝であったことをも記しておきたい。



関宿西追分

注

- 1) 『御蔭耳目』p.367上段の「萩原（ハイバラ）」の校注には、萩原＝榛原が初瀬街道の宿場としか記されていないが、本文に書いたように、榛原の「札の辻」で初瀬街道は「青越え伊勢街道」と「伊勢本街道」とに分岐することを記しておくべきであろう。伊勢本街道は参宮本街道とも言われ、「南北朝以後、伊勢国司北畠氏が現在の津市美杉町の多氣に館を構え、多くの武士団が居住し初期城下町を形成したことや、伊勢参宮者の増大にともない多くの人々がこの街道を利用した」[[「みえの歴史街道 伊勢本街道」三重県ホームページ]とされている。また、『御蔭耳目』同頁の「相可早ひかつひ田丸（「負ふが早ひか着ひたまる」か）」の「相可（おうか）」についての校注（p.369にも）に「熊野街道の宿場相可」とあるが、「相可」は「田丸」とともに「伊勢本街道」の宿場でもある。相可の「札の辻」で伊勢本街道は熊野街道と交わるのであるが（ここに文久3（1863）年11月に建てられた道標があり、「伊勢本街道」「すぐ ならはせ道」「右 くまのみち」と刻まれている [[「みえの歴史街道 伊勢本街道」ウォーキング・マップ, p.31]]), ここは



関宿東追分

伊勢本街道に沿って書かれているのであろう。相可について伊勢本街道の宿場であることには触れず、熊野街道の宿場とだけ校注するのは、『御蔭耳目』の校注としてどうであろうか。

- 2) 『荒蒔村宮座中間年代記』, 1977』にもこの磁気嵐による低緯度オーロラが見えたことが記録されている。「七月廿八日 京大やけ共申、又ハ丹波亀山大火事とも申候へ共、左様之義ニ而ハ無之、暮六ツ時分より夜明迄、事之外雲赤く、夜中比ニハ仕切ニ赤ク世上ニ而ハ火之雨ふり申候共申、世上ニ而ハさき立申候」と(p.374)。「ほうき星」=彗星も、文化8(1811)年の記録にこの年の大雨による洪水、山崩れなどの大災害について「是全ほうきほしの出候ニ如斯乱国ニ成」(p.393)と記されているように、凶兆ととらえられていた。他にも天文史に残る大彗星の出現が記録されている。1664-5(寛文4-5)年のC/1664W1、1680(延宝8)年のキルヒ彗星、1743-4(寛保3-4)年のクリンケンベルグ彗星、そして1811(文化8)年のC/1811F1。隕石の大火球と思われる「天火」や宝暦13年9月1日の部分日蝕、天明6年1月1日の皆既日蝕などの天体現象も記録されている。

この荒蒔村『宮座中間年代記』は天正元(1573)年から天保6(1835)年までの260年間余の村方の記録である。宮座を構成したのは村の有力者であろう。荒蒔村は布留神社=石上神宮の氏子生活・信仰圏であり、布留川水系の利水にも関わっていた布留郷『天理市史』, 1958, p.95; pp.227-32』を構成する一村であった。『年代記』に記されているのは、1) 農業経営に関することがら、米と木綿の作柄とその直段の変化が中心である。天候に左右される農業にあっては、風雨に関することがら、とりわけ作況に影響する旱害、水害が細かく記され、被害があれば免租のための毛見を求めたこと、場合によっては強訴に近いこともなされたことが記録されている。日照りが続けば雨乞いが布留神社=石上神宮や地元の明神社で行われ、石上神宮から奈良奉行所に届け出て『天理市史』, 1958, p.833], 万灯笼、踊り、だんじり、相撲が奉納されている。農業生産に不可欠な治水、水利用に関する取り決めがなされ、日照りで水不足ともなれば争論があったこともある。2) 宝永の大震災と津波(大坂での津波被害)、富士山の噴火、その他、文政2(1819)年6月12日の近江大地震などの地震、安永8(1779)年10月4日には桜島の大噴火による降灰が江戸より伊勢の国までであったことなどのさまざまな天変地異、はしかなどの悪疫や(はやり風)感冒の流行も記されている。3) 宮座の営みはもちろんのこと、地域の融通念仏宗誠福寺の本山たる河内国平野郷にある大念仏寺との関係(大和川に沿って教線を伸ばしていた)や、吉野・大峰

山での修験に向かう聖護院門跡様、三寶院門主様が中街道を通り二階堂で休息する際の接待などの信仰生活。4) 村芝居、浄瑠璃、操り(人形)、雨乞い時の踊りをはじめさまざまな機会でのゆかた踊りなどの踊りといった芸能や相撲、勧進富を含む富くじなどの楽しみ。5) 時は元禄15年12月14日降りしきる雪の中、赤穂浪士が主君浅野内匠頭の敵である吉良上野介の屋敷を襲い、上野介の首級をあげ、敵討ちを成し遂げたことを主君の墓前に報告したことなど社会的諸事件についての記載。6) 領主が接遇するための費用を課されることもあったか、朝鮮通信使についても記録されるなど、ひとつひとつ書き上げられないほど、この『宮座中間年代記』は実に興味深い内容をもっている。

現天理市の『福知堂村手覚年代記』(1985)も同様に興味深い古文書である。これは文政13年のおかげ参りの記述から始まり、明治初年までの記録である。農業生産、米・綿の作況及びその価格変化の記録や農業生産に直結する風水害、旱害の状況のほかに、1) 嘉永6(1853)年クリンカーヒューズ彗星、安政5(1858)年ドナティ彗星の記録など天体現象の記録。2) ドナティ彗星は「病気を知らせ給ふなり」(p.556)として、この年の「ころり」の流行。翌年のやはり「ころり」の流行と「ころり」対策として「にぎやかにするがよいと申、毎日神輿太鼓を出し居祭りのことく、又ハ砂埒にわかなどをいた」したことなど悪疫の流行と人々の対応の記録。3) 繰り返し起こる震災、嘉永7(1854)年6月13・14・15日伊賀上野地震、11月4日東海地震と大津波、5日の南海地震と大津波、翌嘉永8年10月2日江戸大地震の記録、その他大火などの天変地異の記録。4) 嘉永2年大和国から「かつぶり(かつぼれ)おどり」が流行したことや嘉永4年には「大和国在・稲荷おとり」がはやったことなど芸能・民俗の記録。5) 天保8年の大塩平八郎の乱、文久2年1月水戸浪人による老中安藤信正暗殺、翌文久3年の天誅組事件、文久6年禁門の変、いわゆる長州征伐から幕末維新に至る社会的諸事件。6) 嘉永6(1853)年5月28日「異国亜墨利伽船四艘相州浦が沖江到着」、翌嘉永7年9月17日「大坂天保山沖へ異国おろしや船隻艘到来ニ付大坂騒動」といった緊迫した日本を取り巻く国際環境の変化についての記録。慶応3年の「ええじゃないか」についての記述はないが、さまざまな事柄に関する情報が村方にまでかなりの確度をもって伝わり、それが書き留められ、次世代に語り継がれていたことが、これらの古記録のよって分かる。

- 3) このなかで風呂の施行について、各地の市町村史に「風呂の施行を行ったという記載はない」(p.11)と記しているが、以下のコメント4にあるように、

『浮世の有さま』にも東海道遠州見付宿において風呂・髪結いなどの施行が行われたことが書かれているし、このことは『磐田市誌』に史料を引いて記載されている。また、御所御坊ともいわれる円照寺檀家はほとんどが施行に加わっていないとされるが、浄土真宗・その門徒と伊勢信仰・伊勢参宮との関係を問おうとしていないのは何故だろうか。

- 4) 『御蔭耳目』p.321の校注「浪華玉造へ出て…」で、明和8年の御蔭参りの大坂からの道行きについて、暗峠を越える街道が多く利用されたとしながらも、大和川沿いに王寺町にぬけるものもあるとしている。大和川沿いに王寺町へ抜ければ、龍田越え奈良街道に行くこともあれば、北寄りに進まず田原本に出て、中街道に交わることができる。暗峠越えの道は「初瀬から名張を経て松坂へ出る（いわゆる青越え伊勢街道）」とあるように、本居宣長一行も松坂から桜井に出るまではこの道筋を通ってきた。しかしながら、帰路は初瀬街道を榛原まで進み、ここで「伊勢本街道」に入っている。この道も伊勢参宮によく利用された。文政13年の御蔭参りの際でもそうであったことは〔相蘇一弘、1975〕からも分かる。
- 5) この宮座文書は『荒蔭村宮座中間年代記』ほどの年々の記録を残してはいない。慶応3年のええじゃないかの記録もない。明和7年7月28日のオーロラについては「夜六時半より北之方そら大赤二赤く見夜ふけ次第四方江光明のこして筋立」「是ハ雲焼けニ御座候由、百四拾年以前ニも如此の雲焼け有之候様、宿老の衆の相語りニ御座候」と記されている（p.147）。
- 6) [岩井宏實、1987、p.162]は「二階堂施行場は、天理市田町の厳島神社のところで、『文政十三年庚寅十一月』銘の灯籠がそれをあらわしている」と述べているが、これはおそらく誤りであろう。岩井は『天理市史史料編』、1958所収の荒蔭村『宮座仲間年代記』を引いているが、この年代記を通読していくと、例えば修験者の吉野・大峰修業に関わる「聖護院様峰入二階堂御通り」（元禄6（1693）年8月）、同年極（12）月「二階堂ニ初而市初ル」（p.335）のように、しばしば「二階堂」が出てくる。この「二階堂」は中街道沿いの二階堂にはかならない。本文に記したように菅田にも「文政十三年」銘の太神宮灯籠がある。また、『天理市史史料編』には「小字名」一覧があるが、現天理市田町にあたる大字「田」には「二階堂」という小字はみられない（p.576）。このことから岩井の見解には無理があるといえるであろう。自らが参照している『天理市史史料編』をしっかりと読めば、こうした議論は出てこなかったであろう。

また、[岩井宏實、1987、pp.137-8]に布留郷での「雨乞い」が行われた年を荒蔭村『宮座中間年代記』からあげているが、寛延3年の中踊り、安永9年の大踊りが抜けているほか、「中踊り」に「チウヲドリ」と読み仮名を付してある年は「元文5年」であることを誤っている。さらに、御蔭参りがあった明和8年の農作物は大日照りのため不作であったとする『宮座中間年代記』の記述のうち「棉作ハ大むしニ而沓反ニ拾二三斤より四五拾迄ふき申候」を、「綿はことのほかよく実り、ようやく立ち直りの兆が見えて安堵したところであった。そこから太神宮の御蔭を意識したのであったらしい」〔同上書、p.156〕と解釈し、みずからの立論としている。これは成り立つであろうか。「大むし」は宝永4年の記述「本綿ニ虫入」のように「大虫入」であり、虫害が生じたことを意味する。〔忍阪村座中間、1981、p.147〕によれば、明和8年は「ころと云う虫諸作ニたかり、何と云事なく皆くひたおし、人之家内へ入込、衣類其外諸道具迄かむり申候」ということであった。綿の作況について、『荒蔭村宮座中間年代記』によれば、同じ明和年間でみても、2年は大雨や大日照りの時もあったが「実綿之儀ハ沓反ニ壹百より壹百貳拾斤ぶき」であったのに対して、明和8年の2年後の安永2年は「本綿大不作ニ付、沓反ニ付拾貳斤より四五拾迄ふき申し候」、安永8年は「綿不作ニ付沓反六七拾迄ふき」であった。明和8年の綿の作況が「ことのほかよく実り」などという評価ができるか否かは『宮座中間年代記』を丁寧に読めば明らかである。誤った評価にもとづく立論は成り立たない。文政13年の御蔭参りの時とは違うのである。但し、〔忍阪村座中間、1981、p.147〕によれば、「此年（明和8年）前之寅之年より続て麦作ハ十分ニ御座候故、御百性も夫故秋作無毛同前ニ御座候得共、兩年麦作相応ニ御座候故、飯米等ハどふやらくひ続き申候」ということであった。

あるいはまた、[岩井宏實、1987、p.168；p.177]で文政13年の御蔭踊りについて、田原本や柳生では領主が御蔭踊りを禁制あるいは抑制したとして『文政十三年御蔭耳目』から「俵本は織田領分なるが『御蔭踊りすべからず。若これをなさば、発頭人を召捕、厳科に行べし』…」(p.360)を引用している。校注にもあるように、俵本（田原本）は平野氏の所領であり、織田氏の領分は柳本である。本文で『荒蔭村宮座中間年代記』から引用して、柳本では御蔭踊りが禁制されたことに触れた。このことからすれば、『御蔭耳目』は柳本とすべきところを「俵本」と誤って聞き書きしたと考えられる（校注はこの点については何ら触れていない）。荒蔭村から近い田原本の御蔭踊りについて『宮座中間年代記』は何も記していない。岩井の史料批判は不十

分だといわざるをえない。ついでに、田井庄町の神社を「八坂神社」としているが(p.178)、正しくは「八剣神社」である。

- 7) [茨木啓子, 1993]は、その時点までに刊行されていた市町村史から関連事項を丁寧に纏めている。p.152下段の「山之坊村(現天理市)」は、「現樫原市」の誤りであろう。また、p.157表中の「初瀬村、萩原村 施行なし」は、「[文政十三年おかげ参り・踊りに付]、2011, p.1119」に「初瀬・萩原辺へ施行物并竹輿日々持行」、「今井施行所一本木といふ所へ小屋建」、「於萩原施行場借相」、また「[文政十三年おかげ参りに付施行控]、2011, p.1121」に松山町や川向と相談の上「角川原(角柄カ)村へ参り」毎日施行したことが書かれていることから、訂正される必要がある。論文執筆の時点で町村史から大和国からのお蔭参りが山之坊村、忍坂村の2村しかみられないことを根拠に「大和国ではお蔭参りに出るよりも施行が主であった」(p.155下段)としているが、この結論仮説はまずありえないだろう(さまざまな史料が公刊された事後から言っているのではなく、発想としてありえないだろう)。大和での施行が盛んに行われたことは確かであろう。おかげ参りに出た実人数と施行に関わった地域の実人数を比較すれば、後者の側は地域集落のほとんどすべての家であるからこちらのほうが多いかもしれないが、大和国からのお蔭参りがわずかな数の村落に限られるなどとは到底考えられない。『浮世の有さま(御蔭耳目)』でも大和国からのお蔭参りについての伝聞が記されている。先に引用した「[文政十三年おかげ参りに付施行控]、2011, p.1121」にも「[文政十三年末方阿国よりおかげ始まり追々参り、夫より紀州・大和・五畿内追々国々よりおひたし参詣ニ御座候」とあり、その後刊行された市町村史、発見された史料は大和国でのお蔭参りの具体的事例を明らかにしつつある。一例をあげれば、[中井陽一, 2007, p.9]は、御所町の施行宿泊者は、紀伊4,073人、阿波887人に続いて、大和国449人が3番目の人数になることを示している。

また、「青田を刈られる」などの「御蔭参りの群衆によって起こされる神乱から生活を守るため」に大和の人々は「村をあげて施行を行った」という立論は、はたしてそうであろうか。「青田刈り」された田は、手当たり次第に、施行をしない村、地区の田であるとして選ばれた村であろうか。そのような行為があり、当該の村、地区と争いになれば、村請をしている村落全体が結束して「青田刈り」という暴乱に対抗するするであろうし、ましてや年貢を確実に収取しようとする領主権力がこれに介入するであろう。そうではなくて、「青田刈り」があったとすれば、それは施行を行う村、地区内

の諸規律から生じたのではないか。施行は個別的な報謝の側面があったが、同時に、村として各戸の「分限相応の負担」によって行われた側面が強いのではないだろうか。例えば、[相蘇一弘, 1975, p.20]に引用された明和8年の御蔭参りについての古文書にあるように、大坂では施行のための「此銭を取集める事、町により宿老より施し奉加帳廻り家持の多くハ壹軒に三十貫文、少きハ五百銅ほど也。顔づくにて、無志者も、いやともいハれず、分限相応の世上格に、出銀せねばならぬ世の習、是非なき事也」であった。そのため、こうした町方の規律に背き、「萬一無志出銭せぬ家あれば、氏神参りの引物、段尻などを其家へ持掛、格子を破り、屋根瓦などを損ずる讐を含む故に、是に込りて、いやなからも出銭する事なり」[『御影参 難波語 辛卯奇譚』, 1995, pp.103-4]ということになったという。このことを村方におきかえれば、既存の村落内秩序を維持するためにも、あるいは「分限相応の負担」を拒む上農層に対する戒めとして「青田刈り」のような「制裁」行為が生じたのではないだろうか。

ついでに、付け加えておけば、『御影参 難波語 辛卯奇譚』にも、宝永の地震、富士山の噴火のほか、明和7年7月28日の磁気嵐にともなう低緯度オーロラの事などが最後のほうに簡単に記されている。「北方総天紅の如く、及深更、大坂の空へ、此紅に燃えたる雲色棚引、怪敷運氣也」と。「又掃星、その外怪星度々出る」と(p.132)。追記には、低緯度オーロラについてより詳しく「真北にハあらず丑の方と覚ゆ。其赤ミ紅にハあらず、火の色なり。始には遠方の火事と見えたりしが、次第に広がり、その中に白き筋、日の入、また弥陀の後光の如くに立たり」[『同上書』, pp.135-6]とある。

- 8) [岩井宏實, 1970, p.38]は混乱している。「手前から三列目だけは男」としながら、「女は扇子をかざして踊っている」と書いている。[岩井宏實, 1987, p.183]では訂正されている。
- 9) この伊賀上野から伊賀街道・奈良街道を通るルートは、現、奈良県川西町吐田の伊勢講が元禄11(1698)年の伊勢参宮の際に、奈良から笠置、島原、伊賀上野までを伊賀・大和街道を行き、そこから辿った道筋である。帰りは伊勢本街道から榛原を経て初瀬街道を三輪に進み帰村している(『御参宮道中万入用日記』[『川西町史本文編』, 2004, p.189])。

参考文献

- 相蘇一弘(1975)「おかげ参りの実態に関する諸問題について」『大阪市立博物館紀要第7冊』
『荒蒔村宮座中間年代記』(1977)『改訂 天理市史史料編第1巻』

Oct. 2021

50年目の読者より

茨木啓子 (1993)「文政十三年のお蔭参り・お蔭踊りに
ついて——大和国を事例として」『ヒストリア』141
号
岩井宏實 (1970)「お蔭踊私考」『芸能史研究第29号』
岩井宏實 (1987)『地域社会の民俗的研究』法政大学出
版会
『磐田市誌下巻』(1954)
『磐田市史 史料篇5 近世追補2』(1996)
上野和男 (1992)「荒蒔の神社祭祀と社会構造——宮座・
家族・村落組織を中心として」『国立歴史民俗博物
館研究報告』第43集
『大阪府の地名』(1986)日本歴史地名大系第28巻, 平
凡社
大田南畝 (1900)『改元紀行』『続紀行文集』博文館
大田南畝 (1930)『壬戌紀行』『柳田国男校訂, 紀行文集
(帝国文庫第22集)』博文館
『御蔭踊に付申上書』(1986)『田原本町史史料編第2巻』
『御影参 難波語 辛卯奇譚』(1995)服部良夫翻刻・
解説『びぞん』No.88・89
忍坂村座仲間 (1981)「庚元文三歳 正月十二日慶珍新
改之帳」『桜井市史史料編下巻』
「改正京町御絵図細見大成」(1977)天保2 (1831)年初
版, 慶応4 (1868)年再版『太陽コレクション古地
図散歩 京都・大阪・山陽道』平凡社, 付録
『改訂 天理市史上巻』(1976)
貝原益軒 (1973)『大和巡覧記』((元禄9 (1696)年板行))
『益軒全集巻ノ七』国書刊行会
貝原益軒 (1930)『岐蘇路記』((宝永6 (1709)年板行))
『柳田国男校訂, 紀行文集 (帝国文庫第22集)』博
文館
「聞書控」(1984)『改訂 新庄町史史料編』
『橿原市史』(1962)
『川西町史』(2004)
『川西村史』(1970)
国立極地研究所・総合研究大学院大学・国文学研究資
料館の共同研究「江戸時代におけるオーロラ絵図
と日記から明らかになった史上最大の磁気嵐」各
ホームページ
「御参宮道中万入用日記」(2004)『川西町史本文編』
「慶応三年御蔭参いじゃないか役割」(2004)『川西町史
史料編』

『桜井市史』(1979)
澤井浩一 (1990)「村落祭祀と集落形成——天理市荒蒔
の宮座儀礼の検討」『大阪市立博物館研究紀要』22
号
「諸事記録帳」(1984)『改訂 新庄町史史料編』
「諸事控覚書」(2004)『川西町史史料編』
「法念寺過去帳」(1981)『桜井市史史料編下巻』
田原本中学校郷土研究部 (1986)『田原本町の太神宮灯
籠』『田原本の歴史第5号』, 1986
「天保元年上町おかげ灯籠建立諸入用并寄付記帳」
(2011)『大淀町史史料編第1巻古代中世近世上』
『天理市史史料編』(1958)
中井陽一 (2007)「文政十三年おかげ参りに関する考察:
大和国御所町の施行記録に基づいて」『史泉』105
号
奈良県教育委員会 (2014)『奈良県の民俗芸能2 奈良
県民俗芸能緊急調査報告書』
『福知堂村手覚年代記』(1985)『改訂 天理市史史料編
第1巻』
「文政13年御蔭参り・踊りに付き」(2011)『大宇陀町史
史料編第1巻古代中世近世』
「文政13年御蔭参りに付き施行控え」(2011)『大宇陀町
史史料編第1巻古代中世近世』
牧村史陽 (1970)『お蔭参りとお蔭燈籠』(史陽選集41),
史陽選集刊行会
『松原市史第1巻』(1985)
『三宅町史』(1975)
本居大平 (1927)『おかげもうての日記』『本居大平全集』
『本居宣長全集第11巻』吉川弘文堂
本居宣長 (1973)『菅笠日記』『本居宣長全集第18巻』,
筑摩書房
本居宣長 (1974)『日記』『本居宣長全集第16巻』, 筑摩
書房
戴重孝 (1931)「慶応三年大阪に於ける御蔭騒動」『上方』
創刊号
吉村公男・羽田野由憲 (1987)「元禄期における奈良盆
地荒蒔村の景観」『明石工業高等専門学校研究紀
要』29号
「万珍敷事覚帳」(1986)『田原本町史史料編第2巻』

(2021年7月16日掲載決定)